5章　始まっています「北の住まいるタウン」の取組

北海道当別町、北海道鹿追町は、北の住まいるタウンの「モデル市町村」として、特色ある取組を展開しています。これから北の住まいるタウンに取り組む際の参考としてください。

5－1　「北の住まいるタウン」モデル市町村

北海道　当別町

人口：16,365 人
世帯数：7,646 世帯
面積：422.86k ㎡
（平成 30 年 1 月 1 日現在）

当別町は、札幌市と境界を接し、札幌都心部から約 45 分の近距離に位置しています。農業を基幹産業とする札幌近郊の田園都市です。

特色ある住宅地形成による移住定住の促進、官民共同による生活交通の確保と資源循環を両立したコミュニティバスの運行、町内にある大学と連携し、多世代共生の福祉の拠点づくり、など様々な取組に積極的に取り組んでいます。

また、平成 29 年 9 月には、特産品開発の拠点となる道の駅も整備されました。

現在は、コンパクトなまちづくりの推進を目指し、公共施設の再編と中心市街地の再生の検討という未来に向けた重要課題へのチャレンジも始まっています。

北海道　鹿追町

人口：5,503 人
世帯数：2,487 世帯
面積：402.88k ㎡
（平成 30 年 1 月 1 日現在）

鹿追町は、十勝平野の北西に位置し、農業（酪農・畑作）と観光を基幹産業とする農村地帯です。

道内有数の酪農・畑作地帯として発展するなか、長年、衛生面や臭気に悩まされていた家畜ふん尿をエネルギーに変えるバイオガスプラント 2 基（中鹿追･瓜幕）を整備し、バイオマスエネルギーを畑作の堆肥として利用するなど、エネルギーの地産地消が進められています。

また、豊かな自然を活かし、ジオパーク、ネイチャープログラム、ライディングパークなどを活用した地域の子どもたちの学習・体験・教育に力を入れているほか、山村留学や農業体験研修を通じた地域内外の人材交流も長年実施するなど、多くの地域資源を積極的に活用しています。

5－2　北海道当別町における「北の住まいるタウン」の取組

複数のバスを一元化し、官民共同で町民の移動を支えるコミュニティバスを運行

当別町では、バス事業者の撤退により、住民対象のバス路線は平成 17 年当時２路線しかなく、便数も減少していました。一方町内では、町で運営する福祉バスがあり、また北海道医療大学が運営する学生や患者対象のバス、スウェーデンハウスの地域限定住民バスが運行されていました。

そこで町では、様々なバス運行事業者や関係機関、専門家が参加する「当別町バス交通体系調査委員会」を設置し、検討を行いました。検討の結果、大学、地元の病院、企業の３事業所と、町が参加し、新しいバス運行のための実証実験を行いました。実証実験後、平成 23 年４月から官民共同によるコミュニティバス「当別ふれあいバス」を運行しています。運行を担う下段モータースでは天ぷら油などの廃油をバイオディーゼル燃料としてリサイクルし、CO_2 排出削減に取り組んでいます。

バイオディーゼル燃料で走るノンステップバス

障がい者や高齢者の暮らしを支え合う、多世代共生の地域福祉拠点づくり

町内の社会福祉法人ゆうゆうが、地域住民と共同で共生型コミュニティー農園「ぺこぺこのはたけ」を運営し、高齢者の生きがいづくりや、障がい者の就労の場となっています。基幹産業の農業を活かした地産地消の本格レストランも併設し、地域の交流の場にもなっています。

同法人は、地域住民の集いの場であり障がい者が就労できる場として共生型地域オープンサロン「ガーデン」も運営。カフェや駄菓子屋は、高齢者が子どもたちや障がい者と関わり合う場、子どもたちが集まる遊びと学びの場でもあります。

また、町の豊富なボランティア資源をより有効活用するため、高齢者ボランティアや学生ボランティアの情報を集約し、各種ボランティア団体を連携させる拠点として共生型地域福祉ターミナル「みんなのうた」も運営。オープンスペースや会議室もあり、地域交流の場として活用されています。

共生型地域オープンサロン「ガーデン」

共生型コミュニティー農園「ぺこぺこのはたけ」併設のレストラン

道の駅開業、地域商社設立で農商工連携の６次産業化、インバウンド観光拠点へのチャレンジ

「北欧の風　道の駅とうべつ」は平成29年9月23日にオープンした札幌から最も近い位置にある道の駅です。道の駅の運営会社として地域商社（株式会社 to be（トゥビィー））を立ち上げ特産品開発も手がけるなど、農商工の連携による6次産業化やインバウンド観光の拠点として期待されています。

当別町はスウェーデンのレクサンド市と姉妹都市であり、町をあげて交流も深く、ものづくり体験や食のイベントなども数多く企画しています。駅舎は木のぬくもりが感じられる北欧風のデザインとなっています。

話題のレストランや当別町のセレクトショップ、特産品ショップ、スイーツコーナーなどがあり、春から秋までオープンする農産物直売所では、当別町の約70戸の農家が丹誠込めて育てた旬の野菜をはじめ、地元の肉製品、さらに、北海道でも有数の産地として有名な花も販売して人気を呼んでいます。

年間来場者の想定を大きく上回り、5ヶ月半で36万人の来場がありました。

環境にも配慮し、多様な再生可能エネルギーの活用にも取り組んでいます。西当別地区は近郊よりも、地中温度が6℃～14℃、採熱量は1.03～1.52倍高いため、その地域性を活かした地中熱利用を見える化するパネルも設置してあります。

北欧風の駅舎外観

北欧のインテリアショップの家具を採用

オープン後、連日多くの来客で賑わっている

地中熱利用システムを説明するパネル

農産物直売所。冬期間は休業

民間の力と知恵を生かした多世代共生・参加型の生涯活躍のまちづくり

当別町も人口減少や高齢化といった大きな課題を抱えています。当別町の優位性として、札幌市との近接性や交通アクセスの良さがあります。また、北欧の豊かな環境を感じさせる自然と街並みが調和した住宅地「スウェーデンヒルズ」では、道外からの移住者が増加しています。

町内には医療系総合大学の「北海道医療大学」があり、約 3,500 人の学生が学んでおり、様々な「福祉のまち」の取組を町民と共に行なっています。

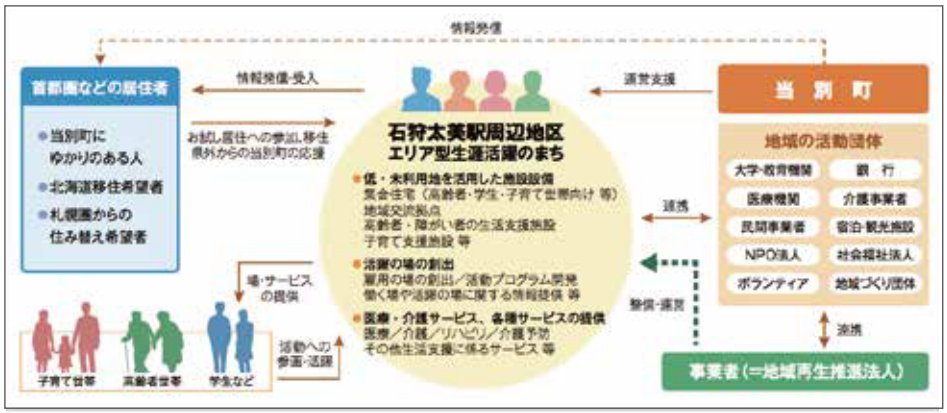
町が有するポテンシャルを活かし、集合住宅、地域交流拠点、高齢者や障がい者の生活支援、子育て支援施設などの整備を通じ、アクティブシニアの移住定住を促し、地域で活躍交流できるまちを目指しています。

期待される効果としては、アクティブシニアの転入増加だけでなく、多世代交流による定住促進、健康寿命延伸の取組進展、地域が抱える課題の解決、経済波及効果等があげられます。

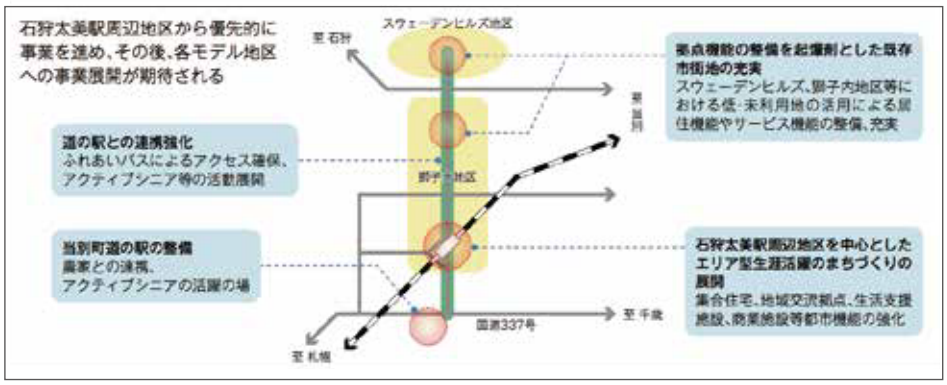
モデル地区としては、①石狩太美駅周辺地区（比較的生活利便施設が集約している。福祉施設や温泉施設が近傍にあり、未利用の町有地がある。）②獅子内地区（未開発の住宅造成地が残り、戸建住宅を整備しやすい。）③スウェーデンヒルズ地区（スウェーデンの北欧型建築の家が建ち並ぶ住宅地。道外からの移住者が多い。）の 3 地区となっています。

石狩太美駅周辺地区では、集合住宅、地域交流拠点、高齢者や障がい者向けの生活支援、子育て支援施設などの整備を行う「エリア型生涯活躍のまち」を展開することとしています。

スウェーデンヒルズの街並み



石狩太美駅周辺地区エリア型生涯活躍のまち



モデル地区と事業展開

老朽化した公共施設の建替集約化、コンパクトシティ形成による市街地再生へのチャレンジ

当別町では、役場庁舎、学校などの老朽化が進んでいます。公共施設等総合管理計画を踏まえ、各施設について廃止、改修等を分類する公共施設のあり方を作成し、方向性を整理しているところです。

公共施設の建替えに伴い、単なる建替えではなく、効率・機能の高度化を目指した集約によるコンパクト化が求められています。また、空き家・空き店舗の歯抜け土地の有効活用や商店街の活性化、学生が集えるコミュニティ空間など、市街地機能の再生、まちなかのにぎわい創出も求められています。

平成 30 年度以降は、立地適正化計画策定の中で施設の誘導施策を検討していきます。また公共施設の配置案についても検討しながら、市街地のグランドデザインを描いていきます。

老朽化する公共施設（当別町役場庁舎）

「エネルギーの地域循環体系」づくりへのチャレンジ

当別町は「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中で、「エネルギー地域分散型都市の形成」を基本目標のひとつに掲げています。平成 27 年度には「当別町再生可能エネルギー活用推進条例」を制定し、持続可能で自立した循環型社会システムの構築を目指しています。平成 30 年度以降は、公共施設の建替えや設備更新にあわせ、本町の地域資源である木質バイオマスの熱利用について検討していきます。

また、民間プロジェクトとして、家庭菜園付きエコ住宅があります。建物は、床と壁に環境にやさしい天然素材を採用し、ペレットストーブを導入するなどし、エコな暮らしを求める移住者の受け皿になっています。

ペレットボイラー

5－3　北海道鹿追町における「北の住まいるタウン」の取組

乳牛ふん尿等の悪臭問題などを解決し、クリーンな農村地域に

平成19年に集中型バイオガスプラント、堆肥化プラント、コンポスト化プラントが整備された鹿追町環境保全センター（中鹿追バイオガスプラント）で、家畜ふん尿や小麦のわらなどの敷料、市街地の生ゴミ、下水汚泥の処理を行っています。また、平成28年には瓜幕バイオガスプラントが整備され、この2基で、町の8割の家庭の電力を賄える発電量を誇っています。

バイオガスプラントで製造した液肥や堆肥は、農地へ還元しています。

廃棄物処理施設を集積させることで、廃棄物処理の効率化、処理費用の低減を実現しています。

当センターは、周辺の利用農家（酪農家）と鹿追町が組織する「鹿追町バイオガスプラント利用組合」が運営しており、組合長は鹿追町職員が兼任し、職員として町民の雇用が創出されました。

施設は町が国や道の補助を活用して建設し、運営管理費は家畜ふん尿の処理料や液肥の散布料等でまかなっています。

従来は各農家が独自に行っていた家畜ふん尿の回収、液肥化、液肥散布に係る作業を全て当センターが行うことで、農家の労力的・精神的負担を低減しています。低減した労力を、家畜管理に振り向けることで、牛の飼養頭数が2割増加するなど、生産規模の拡大につながっています。

家畜ふん尿の処理過程で得られたバイオガスは、電気や熱として施設内で活用し、余剰電力は売電しています。また売電収入は施設運営経費に充てています。

鹿追町環境保全センター（左：瓜幕／右：中鹿追）

鹿追町環境保全センター（中鹿追）の概要

発想の転換が生んだ、一石五鳥のサイクル

乳牛ふん尿や生ゴミ、下水汚泥という、一見、使い道がない厄介モノを、エネルギーに変えるという発想は、多くの効果を生み出しました。

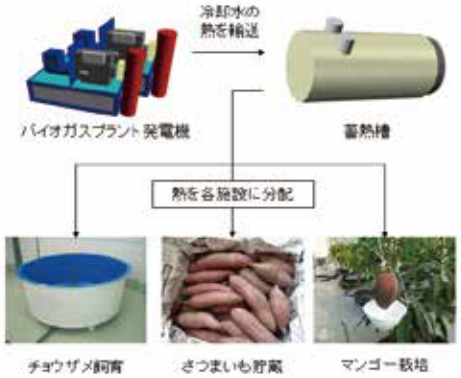
悪臭や衛生上の問題がなくなったのは住民にとっては大きなメリットであることはもちろんですが、観光客にとっての地域イメージの低下要因をなくすことができました。

また、農業の堆肥等として循環させることで、コストが削減され、生産力向上につながりました。

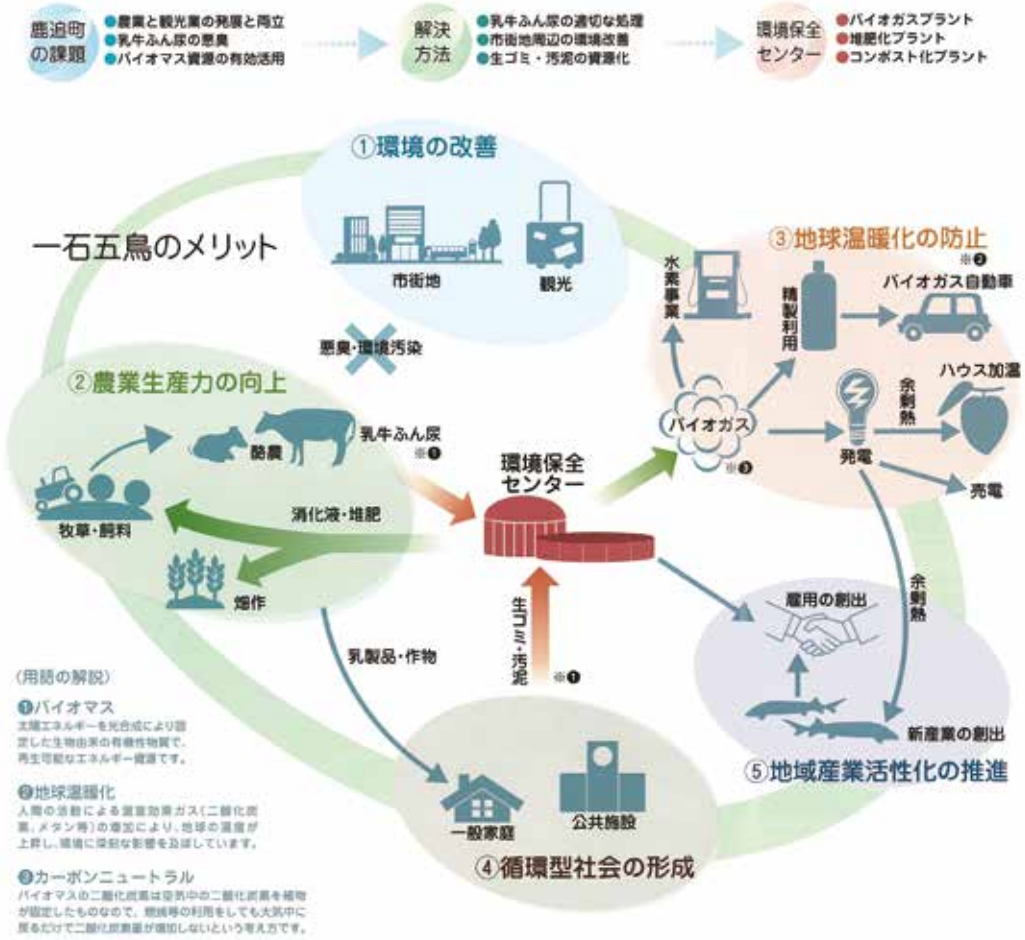
バイオガスは、自動車の燃料として活用するだけでなく、電力を生み出すことで余剰熱利用のほか、地域で自立的にエネルギーを賄う可能性も考えられます。

こうした循環が生んだのは、物理的な効果だけではなく、チャレンジの心の醸成にもつながります。

鹿追町では、余剰熱利用により、新たな地域産業づくりを進めています。



余剰熱を活用した新たな試み



一石五鳥のサイクル

交流や学びの場の提供が、移住・定住促進につながる

鹿追町では、昭和 62 年から、山村留学制度を導入し、鹿追町自然体験留学センターで、全国から多くの留学生を受け入れています。

子どもだけの留学や親子での留学もあります。

子どもが卒業しても親が残るケースや、小学校のときに鹿追に留学し、いったん中学校進学で外に出るが、高校受験の時点で戻ってくるケース、親が鹿追町に住んで、その子どもが働くタイミングで戻ってくるケースなど、山村留学を経験した人が、移住や定住の促進に一定の成果をあげています。

また、女性対象の農業研修を行う「鹿追町産業研修生制度」を設けており、毎年10人程度の募集を行い、酪農研修は1 年間、畑作研修は 7 ヶ月間実施しています。

研修終了後、研修先の農家に従業員として残ったり、別の農家で働くなど、おおむね半数の人が地域に残る成果が出ています。また、町内で結婚する人もいるため、この制度も、移住や定住の促進に一定の成果をあげています。

山村留学中の子どもたち

鹿追町だからできる、新地球学と国際理解教育の取組

然別湖に代表されるように、鹿追町は豊かな自然に恵まれたまちで、平成 24 年には、とかち鹿追ジオパークとして、日本ジオパークに認定されています。

「新地球学」は、こうした地域の資源を生かした小中高 12 年間を見通した環境教育プログラムとして 開発されたものです。

①地域の自然と環境・防災、②地域の文化、③国際理解、④エネルギーについて学習します。

鹿追高校では、カナダのストニィプレイン町と姉妹提携を結んでおり、毎年 1 年生全員が留学します。

留学を念頭におき「カナダ学」という授業が、小中高 一環教育として実施されています。小学校では「カナダ入門」、中学校では「カナダ基礎」、高校では「カナダ研究」を行い、カナダの習慣や文化に触れながら、興味・関心を高め、英語力とコミュニケーション能力を育てています。

カナダへの留学や英語教育の充実が知られ、他の町から通学するケースも少なくありません。

留学した高校生が親世代になり、その子どもも同じように留学する親子の共通体験として、本事業の素晴らしさが町民に浸透しています。

中学校におけるカナダ学。小学校や高校の英語教諭の乗り入れによる少人数に分けた指導を行っている

地域に眠る思いを出し合い、まちの魅力アップにつなげる

地域の潜在的な人材力や女性の感性を、これからの未来の鹿追町のまちづくりに生かしていきたい。

多世代の知恵や町への思いを共有し、地域ぐるみで、わがまち鹿追をさらに元気にしていきたい。

そんな経緯から、鹿追町民 85 名が集結した「しかおい100 人ひらめき会議」が行われました。

この企画から当日の進行までを担ったのは、地元有志で構成される実行委員会のメンバーです。

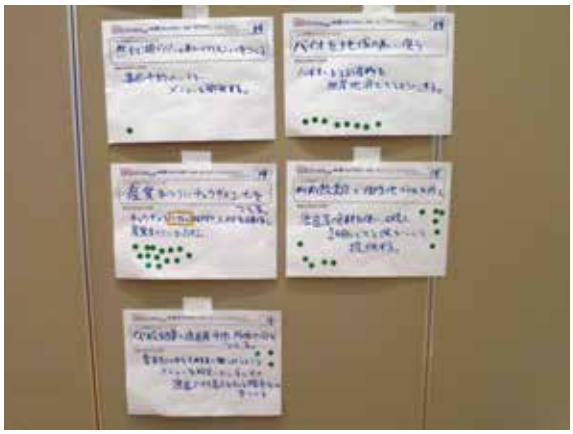
多くの人の様々な価値観や考えに耳を傾け、意見を整理していくファシリテーターも実行委員会メンバーが担いました。話し合いのテーマも、実行委員会で話し合い、①もっと子育てしやすいまちになるためには、②1回鹿追を離れても「戻ってきたくなるまち」ってどんなまち?、③鹿追で特産品として開発しているものをどう広めて行くか考えよう、の3つにしました。

当日は、54のアイデアが出され、現在は、出されたアイデアを実践するために、継続的に実行委員会が話し合いを進めています。

100 人会議は少人数のグループにわかれて意見交換

出されたアイデアが壁一面に貼られ、参加者全員が自分も共感できるアイデアにシール投票をしている

グループでの話し合いの様子



アイデアシート

●「北の住まいるタウン」検討協議会について

道では、平成 25 年 3 月に「次世代北方型居住空間モデル構想」を策定し、コンパクトなまちづくりの取組、低炭素化・資源循環の取組を推進してきました。

これらの取組とあわせて、生活を支える取組も一体的に推進していくため、平成 28 年 7 月に『「北の住まいるタウン」の基本的な考え方』を策定しました。

この中で「北の住まいるタウン」の取組の推進にあたっては、庁内関係部局等が横断的な連携を図り、市町村等に対して必要な情報提供や支援を行うとともに、産官学連携による協議会を設置し、取組に向けた検討を行うことが位置付けられました。

学識経験者、民間事業者等、国機関で構成される『「北の住まいるタウン」検討協議会』は、取組の効果的な推進や普及・啓発に向けた検討、モデル市町村の取組への助言等を行うために開催されています。

このガイドブックは、平成 29 年度本協議会による 2 度の協議を通じて作成されました。

「北の住まいるタウン」検討協議会

●「まちづくりメイヤーズフォーラム」について

北海道の強みを活かしたまちづくりのこれからを考える「まちづくりメイヤーズフォラーム」が、平成 24 年度から開催されています。

各回、精力的にまちづくりに取り組む道内自治体の市長（メイヤー）、まちづくりの第一線で活躍する実践者や研究者を招き、テーマに基づくパネルディスカッションを通じて、北海道の未来を拓く議論が活発に行われます。

第 6 回まちづくりメイヤーズフォーラム

これまでの「まちづくりメイヤーズフォーラム」の概要

	市長参加自治体	開催テーマ
第 1 回（H25.2.6）	下川町 鹿追町	新エネルギーを活用した持続可能な地域づくりに向けて ～「次世代北方型居住空間モデル構想」について～
第 2 回（H26.2.5）	稚内市 夕張市	域内循環型の持続可能なコンパクトシティをめざして ～新エネルギーを活用したまちづくりを考える～
第 3 回（H27.2.9）	釧路市 足寄町	コンパクトなまちづくりと新エネルギーの活用による 持続可能な地域づくりを目指して
第 4 回（H28.2.10）	室蘭市 沼田町	誰もが安心して心豊かに暮らせるまちづくりを目指して
第 5 回（H29.2.13）	鹿追町 当別町	地方創生に向けた自立型の地域づくり～北の住まいるタウン～
第 6 回（H30.2.1）	帯広市 ニセコ町	地域イノベーションとまちづくり～北の住まいるタウン～

北の住まいるタウン実践ガイドブック

～誰もが安心して心豊かに住み続けられるまち・地域～

発 行 日　平成 30 年 3 月

発　　行　北海道 建設部 まちづくり局 都市計画課 新幹線・都市政策グループ
＜住　所＞ 札幌市中央区北３条西６丁目
＜電　話＞ 011-204-5284
＜メール＞ kensetsu.tokei1@pref.hokkaido.lg.jp
＜ホームページ＞ http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kn/tki/kitasuma_top.htm

企画編集　株式会社 石塚計画デザイン事務所